

緑の地球ネットワーク（GEN）の調査研究に参加して 中国山西省大同へ（2009年度と2010年度報告から）

2010年4月22日 雨

午前5:22発の電車で京都駅へ。36分待って6:22発で関空へ向かう。電車の接続が悪く、寝不足のまま7:45着、7:50にみんなと落ち合う。同行は伊藤武さん、栗栖敏浩さん、大原一晃さん（京大林学、M1）の4名。関空9:20発、時差一時間で北京11:40着。河本さんと通訳の余文さん出迎え。途中麺の店で昼食をとり、大同へ向かう。途中高速道路が張家口と大同へ別れるあたりから次第に寒くなり、宣化を過ぎて深井に至る峠で積雪を見る。昨夜降ったらしく、周囲の山は真っ白。4月の雪は珍しく、「卯月末 黄土高原雪見酒」としゃれこんで、空港で買ってきたシーバスリーガルをラッパ飲みしてようやく温まる。大同まで6時間余。7時前にホテル、雲崗国際酒店に入る。遠田さん、高見さん、前中さん、中国側のGENのメンバー武春珍さん、魏さん、小李さんらとあって、ホテル内で夕食。何度訪れていても、中国語憶えられず、意志疎通が難しい。のち遠田さんの部屋で新しい環境林センターの引っ越し予定地の航空写真を見る。意見さまざま。室内が寒く、厚い下着を着て寝る。

4月23日 晴れ

お腹の具合が心配なので、朝食を減らす。8:30出発。環境林センター移転予定地の調査に参加する。市内から一時間以内、約40キロ程度で白登苗圃場にも近い。場所的には条件が良いように思われる。ただし墓地が集まっている地帯で、そのためか、ほかに比べて伐採された地域が少なく、珍しく木が残っている。利用範囲は制限されるが、20ヘクタールは使用可能という。水源、電気、道路などが問題だが、東側に川の跡があるので、水は何とかなりそうである。

風水の関係で墓地が集中していたため、木を植えさせたらしく、今度も厄介なので土地を提供してくれたらしい。ゆくゆくは森林公園にしたいというが、墓が多いので、難しそうである。最近、みんなリッチになったのか、祖先の墓に墓標を建て、結界と称して一定面積を杭や木を植えて囲う習慣がで始めている。この地方の墓は縦穴を掘ってから深い位置に横穴を掘るというので、金持ちの大きな墓ほどマウンドが大きくなるのかもしれない。ただし、風水からみて良くない方角もあるのか空地も多い。高圧線の下も敬遠されている。

1949年の建国以降、新政府の指令によって少老樹 *Populus simonii* Carr. が2メートル間隔で植えられたという。桑干河の水源確保のために水源涵養林として造成されたが、成長が悪く、保水機能もさほどではなかったらしい。

東南ほど木の成長がよいのは地下水位が高いせいかもしれない。土地の起伏はわずかだが、地形によって成長差があり、低地では樹高7-8メートル、胸高直径30センチほどになるが、小高い所では樹高5メートル以下で、胸高直径10センチ程度と成長不良。

最近、林業会社がマツを植えたことになっているが、いじけた油松の苗が、わずかに点在するだけで、ほとんど育っていない。掘り上げてみると、手抜きをしたのか、ビニールポットのまま植えたものが多かった。その方が生き残るとい説もあるらしいが、本当だろうか。菌根がついているものが生き残ったらしく、この時期でも白い棍棒状やフォーク状の菌根が見られた。

冬の間、凍土層ができて霜柱が立つらしく、地表面に亀裂が入っている。落葉の分布は不均一で、裸地のところが多い。落葉がたまったところでも堆積量は少なく、分解が悪い。乾燥しているので、踏むとかさかさとした音がする。落葉分解菌が少ないのか、F層やH層がほとんど見られない。小動物の糞などもないので、団粒構造も見られない。腐植が少ないために、有機物が混じった層は10センチ程度である。土壌は砂質壤土で、礫混じりのところもあるが、全体に砂の比率が高い。ただし、これでも裸地に比べれば、土が肥えているほうである。

林内に道路を敷設するために伐採が始まっていたので、その場所で抜根した根を観察した。挿木で植林したので、太い直根が曲がって深く入っている。細根は横に這い、表土が凍結するためか、深さ20センチまでには根がない。菌根もほとんど認められない。根の本数は多いが、根系は狭く横に広がっていないが、これは植栽密度が高いせいかもしれない。

今はイネ科の草以外、ほとんど見られず、他の季節でも下生えがほとんどないように思われるので、アレロパシーの恐れもある。マツの成長が悪いことや下生えがないことから、樹間植栽する場合は、樹種を選んで植える必要があるだろう。

少老樹は初めまっすぐに幹を立てるが、ある程度大きくなると、伸びた梢端が枯死し、脇芽から萌芽して成長する習性がある。これを繰り返すために、こぶだらけのねじ曲がった幹になるという。高見さんによると、これも乾燥適応の一つで、蒸散量を減らすために樹形を変えているという自己防衛説もあるという。

枯死した木を見ると、材が腐らず、枝も腐朽していない。心材はタンニンが多いのか、暗褐色で分解しにくく、木材腐朽菌はまったく見あたらない。乾燥のせい、材質が菌を受け付けないのか、利用を考える際には、事前によく調査しておく必要がある。一方、虫による食害が多く、そのために材そのものは使い物にならない。新炭として利用するか、食用キノコ栽培を試みる以外になさそうである。

萌芽再生の状態も良くないので、薪炭林のモデルとするには適さない。薪炭用にはポプラやヤナギのほうが適しているが、この地方には石炭が豊富にあるので、その必要がないという。整地のために伐採される木の利用方法としては炭にして、植林や農業用にするのが望ましいだろう。太い木材と伐根を炭化するためには、大型の伏せ焼きをする必要が

ある。炭化した後に粉碎し、し尿や畜糞と混合発酵させて、培土として利用する。将来、花や野菜、花木用と街路樹用に商品化することも可能。ただし、それぞれ仕様を決めるための実験を計画的に行う必要があるだろう。

GEN としては全体の測量が終了した後、圃場や植物園にする範囲をおおよそ決めて、徐々に伐採し、圃場整備、植林などが進める予定だという。近い将来、中国側に移管できるよう、育苗・植栽方法、菌根や炭の利用法など、独自の方法を作り、希少種や観賞用野生植物、有用樹種、薬用植物などを収集栽培し、「山西省の有用植物園」として教育中心に整備されるのが望ましいと思われた。おそらく整備するのに、また 15 年はおかかるだろう。

11 時に見学を終了し、白登苗圃に向かう。すぐ近くにあるので、便利になりそうである。昼食後、準備されている炭と炭堆肥を見に行く。一般に使われている肥やしは家畜や人間の糞尿を土とほぼ等量混ぜた糞土である。素手で触ると臭いにおいが染み付くほどである。これと破砕した炭を 1:1 で混合したものを、一週間前に作り置きしてもらった。炭を加えたものは臭いがほとんど消え、発酵が進んで内部が白色化し始めている。これを炭堆肥と称する。炭だけのものも準備されていたが、多少粗めで、径 2-3 センチのものも含まれていた。もう少し砕いた方がよい。耕作が始まる時期を江南で春耕というが、畑に積んだ肥やしをシャベルで勢いよくばらまくので、煙のように糞土が飛ぶ。これでは日本までアンモニアが飛んできて不思議でない。

キノコ栽培用に伐った少老樹の幹を見る。樹皮が厚くて硬いため、シイタケには不適合なので、ヒラタケに限ることとする。この仕事はすべて伊藤さんと栗栖さんの担当である。

昨年 9 月に孢子をまいたマツ苗の根をチェックする。ショウロが意外によく付き、フォーク状の根が増えていた。ただし、細根の表面に白い菌糸が僅かに見えるが、完全な菌根ではない。中国産ヌメリイグチは付いているように見えたが、日本のヌメリイグチは不適合かもしれない。9 月に詳しく検定することにして、土をかぶせた。ここでは寒冷による害を避けるため、マツの苗を冬の間だけ二年間土で覆うことになっている。その後高見さんの報告によると、ばらつきが多く、写真で見ると菌根はついていなかったとのこと。

やはり昨年 9 月にアンズの根元に炭と熔リンを入れたものを調べる。アンズは乾燥に強いが、これはポプラと同様、根系が深いことによる。直根を深くおろし、地表から 30 センチ以下に横根を伸ばす。鉛筆ほどの太さの横根が 3 メートル以上伸びている。炭を入れる位置が浅すぎたため、根が炭の層まで上がれず、反応はほとんど見られなかった。ただし、炭に向かって伸び上がる根や細根が出始めたものが見られた。再度炭と炭堆肥を埋設することにした。

炭と炭堆肥の施用実験計画を立てる。作目はダイズ、アワ、トウモロコシの三種。炭堆肥は平方メートル当たり 1.5、1.0、0.5 キロ施用することに決める。炭単独では効果がないので、炭のみの施用量は炭堆肥 1 キロ施用区に合わせることにした。これは予備試験で本試験は来年行う。

終了後、劉邦が冒頓単于に追われて、立てこもったという白登山に登る。周辺の地形

がよくわかり、予定地を鳥瞰することができた。6時に市内に戻り、夕食はシャブシャブ。シャワーを浴びて読書ののち熟睡する。

4月24日

7時起床。晴天。白登苗圃へ行く。昨日北の山に積っていた雪は、やはり春の雪らしく、すでに融けて山が黒ずんでいる。新市街が川の東側に広がり始めており、大工事中の真っ最中。9月に来た時と様子がすっかり変わっている。インスタント街路樹の広がり方もすさまじい勢い。旧市街地では高層住宅が林立し、九竜城や寺院など、映画のセット並の早さでできあがるので、これも驚き。白登苗圃へは一時間足らずで行けるので便利になる。仕事の手配をし、三つの予定をこなす。

実施試験内容

① 炭と炭堆肥の施用試験

この試験は炭や炭堆肥の農作物に対する効果を検討するためのものである。一つには伐採される少老樹の利用法として、もう一つはこれから出てくると思われる果樹や街路樹の剪定枝や枯死木などの利用法を探すために行う。なお、現地では炭の原料がほとんどないので、この方法を一般に普及させることは難しい。したがって、農業技術として普及を図るためには、し尿や家畜糞の高度な処理方法として、ゴミや畜産廃棄物、汚泥などを炭化したものを用いる工夫が必要になるだろう。

炭および炭堆肥の試験地（6メートル×80メートル、4メートル×20メートル）を決め、施用実験計画を立てる。ダイズ、アワ、トウモロコシの三種を栽培する。炭堆肥は1.5、1.0、0.5キロ/m²の三段階とし、堆肥と炭もそれぞれ同様の比率で施用する。

試験区は道路沿いで管理棟に近い場所としたが、東側が下がり、石礫が多く土壌は必ずしも均質ではない。試験区の面積は120平方メートルが3区、60平方メートルが2区、20平方メートルが4区とし、炭堆肥の効果を見るのを主にして肥料、炭単独施用区を補助とした。試験区の端に何も施用しない区を設けた。

炭と炭堆肥および肥料は、区毎の施用量をそれぞれ測って各区に配り、シャベルでできるだけ均等にまき、レーキで深さ約15センチにすきこんだ。今年は寒いので作業が遅れているが、トウモロコシは4月下旬、ダイズとアワは5月上旬に播く予定である。植え方は現地の方法に従う。5月末の高見さんの報告によると、ようやく芽を出したところだという。日本に比べると、一か月以上遅い。

② アンズに対する炭堆肥の施用

この試験は、日本での経験に基づいて、果樹や街路樹など、今後増える恐れのある衰弱木の樹勢回復法を見出すために行う。

炭に対する根の反応を調査した結果、3本の衰弱木を対象として根元に深く穴を掘って、根を露出させ、剪定して根に触れるように炭堆肥を埋設した。その上を土で覆い、

水が集まるように畝立てした。これも伊藤さんと栗栖さんの担当である。

③ キノコ栽培試験

環境林センター予定地で整備のために伐採される少老樹の用途を見出すため、キノコの栽培試験を行う。ヒラタケを少老樹にチェーンソーで切れ目を入れて植菌し、新聞紙で覆って、テープで巻く。ホダ場を小屋の陰に作ってホダ木を設置。なお、4月29日に再度少老樹にヒラタケとナメコを植菌した。これも伊藤さんと栗栖さんの担当。

④ マツ苗床への山土入れ

この試験は土壤に含まれていると思われる複数の菌根菌の胞子を接種するための実験である。後述。

4月25日

大同から渾源を經由し、霊丘へ向かう。有名な懸崖寺を過ぎて、時間があるので恒山へ登ろうかという話になって入口まで行くと、雨が降りだした。霧が濃くなってきたので、登山を断念して道路に戻ると、急に暗くなって風が強まり、黒い雨が降り出した。急激に冷え込んで、雨からみぞれに変わる。こんな時期に行きになるのは珍しいという。「西遊記」に出てくる話のようだった。

渾源の峠を超える標高1600メートルあたりにカラマツの造林地があるので、車を降りて見る。成績不良のところはシラカンバが侵入し、自然に増えている。場所によってカラマツの成長にむらがあり、間伐していないので、過密のために細い。山の上のほうが比較的よく育っているが、全体に生育不良。平地は夏の温度が高すぎてカラマツには向かないらしい。大同市の北では枯れていたがここは残っている。一度菌根菌採集してみる必要があるだろう。

途中、鉱山労働者用の保養施設で、昼食をとり、休憩して温泉に入る。温泉とはいえ、大きな円形の深い浴槽とシャワーがあるぐらいで、殺風景なものである。パンツ一枚の三助がいて垢擦りをやってくれるが、遠慮した。高見さんや伊藤さんによると、皮がむけるほど擦ってくれたという話。4時にはホテルに入ったが、悪天候で風が強い。夕食をホテルの食堂で取り、早く休む。夜から雪になり、周囲の山は朝には白一色になっていた。

移動の途中で考えさせられたことがある。油松や障子松など、中国のマツは日本のアカマツやクロマツよりも、乾燥や低温などの不良環境に対する適応性が高いのではないだろうか。というのは、観光地の道路沿いには苗圃で育てた大きなマツがまとめて植えられているが、それが結構育っている。枝を剪定しないまま植えるので、いったん葉がしおれ茶色になって落ちる。死ぬかと思うと、その後短い新葉が出て、かろうじて生き残る。下枝は枯れあがり、少量の葉が先端だけについた、しょぼしょぼの樹形になって、厳しい環境に適応するらしい。このような形態の変化は2年がかりで進行する。

町の中でも大きなマツが街路樹として、そのまま植えられているが、かなり枯れている。大気汚染の激しい都市域でも、同じように適応するか、どうかは疑問である。4メート

ルに余る大きなマツを根引きして根を菰で包み、長距離輸送して、そのまま植える。植える時期はお構いなしで、年中植えているらしい。菰が新しいので、根回しはしていないようだが、水分があれば発根するのかもしれない。小さい苗から植えた場合は、自然に適応しやすいので、生長は比較的良い。

ヤナギについてみると、道路沿いに植える時はポプラ同様 4メートル程度の枝を、深さ 50センチほどの穴に差し込み、一種の挿木をする。塩害地（ところどころ白く塩が吹いていて植物が育たないところがある。カルシウム、マグネシウム、ナトリウムなどの炭酸塩類の集積によるという）で育つのはヤナギだけだが、ひどい所ではヤナギも育たない。客土をすると、なんとか生き残っている。ヤナギやポプラが比較的簡単に育つので、マツも同じことと考えているらしく、あちこちに一夜庭園ができています。高見さんによると、これが本当の「植林（植えられた林）」だとのこと。

なお、広くマツも植えられているが、場所によって成育に差があり、枯死率が高いのは塩類障害によるように思える。少老樹は伐採して芽を出させて間引くと、垂木になる程度の材木がとれるという。ポプラの値段はかなり高いので、間伐するのを嫌がるそうである。

どこまで行っても、道路に沿って両側幅 50メートルのベルト体にポプラとマツを植えている。ポプラはすでに 10年以上たって大きくなっているが、マツはまだ小さくかなり枯れている。20年ほど前に福建省に通っていたころ、シンポジウムがあって、中国の人が緑色革命の宣伝をしていた。内容は百年計画で長江流域と道路沿いに植林するという話だった。ほんとかなと思っていたら、やりだした。なぜ道路沿いに植えるのか、目隠しするつもりかという人もいるが、これは遠望深慮から来ているらしい。中国の紙消費量は年々ウナギ登りで、パルプの輸入量は先進国を凌ぎ始めた。パルプ資源がなくなるのは目に見えているので、将来を慮って植えているように見える。輸送に便利な道路沿いに植えるというのも、さすが中国と納得がいく。

4月26日 霊丘

8:30にホテルを出て、南山に向かう。温度が異常に低く、山には雪が積もる。道路はすいていて快適。ホテルから現地まで、1時間かからない。舗装が完了して快適になった。風強くきわめて寒い。零下5℃。9:40から作業開始。

伊藤さんの指導でキノコの種菌を植え付ける。ポプラとニレの材木にドリルで穴をあけ、ヒラタケ、ナメコ、シイタケの三種ののこ屑種菌をポプラ、ニレ、モンゴリナラに接種。蟻で封じる。一部は新聞紙とテープで抑える。切り株に植えるのも試みる。

別動隊は、カササギの森の成長不良のナラに用いるため、ナラとマツの表土を採集に上まで登る。苗圃にある樹高4メートルほどになったモンゴリナラの根を調べたが、菌根はまったく見られず、菌根がついていた形跡もない。カササギの森に植えたのと同時期に、この木を植えたというが、カササギの森のナラは育っていない。若い根が動き始めており、

小さな白い根端があった。おそらく菌を接種しないと、成長がよくなると思われる。ポットで育てた苗にも菌根は見られなかった。根は地表から10センチ以下に分布し、太いゴボウ根が深く入る。細い二次根はまっすぐに延びて、細い根を高頻度に出し、その先端のひげ根に菌がつく。マツの根に比べて細く繊細で、菌根にならなかったものは一年で黒くなって腐る。

午前中はコートを脱いで出たのに、途中急激に温度が下がり、急いで上着を取りに行く。土取りに行った人たちが帰ってきて昼食。例によってインスタントラーメンを食べる。午後作業を再開しようとしたが、停電のためにドリルが使えず、断念。植菌の終わったものを石垣沿いに伏せこんでいると、雪が舞い始め、次第に吹雪になる。早々に作業を切り上げて、建物に入る。異常な猛吹雪で見る間に道が白くなり出したので、雪の中をバスが待っているところまで下ることにした。

老人組は車に乗せてもらったが、若い人たちは歩いて降りる。風が強く、雪が頬に当たって痛かったという。全員雪まみれで到着。ひどい日になった。帰路の舗装道路では雪が融けていたので、バスもスムーズに走る。次第に雪がやんだが、周辺は真っ白。岩山や農家に積もる雪は一幅の絵のようで、実にきれいだった。3時頃ホテルに帰り、日誌をつけ、本を読んで昼寝する。高見さんと伊藤さんは温泉に行ったという。雪が降りしきる。大同も温度が下がり、雪が積もったという話だった。

4月27日 8時半出発。渋滞もなく、40分で南山植物園に着く。川に氷は張っていたが、道路の雪は消えて車で上がる。温度は低く、体を動かしていいないと震えあがるほどである。チェーンソーでポプラとニレ、ナラに切れ目を入れて、手で種菌を詰め込み、ニレとナラは蠟で封じ、ポプラは新聞紙で覆う。一本ポプラを倒したので、ホダ木の数が増えた。菌がうまく回れば、ヒラタケは今年の秋に出るかもしれないが、乾燥が激しいので、何とも言えない。秋に菌のまわり方を見ることにする。生木に植菌しているのでさらにむずかしいだろう。

午後2時ごろまでに作業は終了。北京から幹部が来て、高見さんたちが山へ案内する。夕方になると、さらに温度が下がるというので、客が帰るのを待たずに歩いて下る。途中オキナグサを見る。紫色のきれいな花をつけるが、採集した伊藤さんによると、ゴボウのような根はひどく深かったという。4時にホテルに帰り着く。暑いときの労働も疲れるが、寒い時も体力を消耗するらしく、昼寝と読書で休まる。

4月28日

積雪のため渾源へ抜ける峠が不通になり、広県から渾源へ出て大同へ向かう。3時間半かかる。昼食は羊の骨付きあら煮。去年これを食べた後で、猛烈な下痢に悩まされたので、恐る恐る食べたが大丈夫。そのまま白登苗圃をへてカササギの森へ向かう。ここは標高が高いので、春先はまことに殺風景で、風が強くて寒い。道が何とか乾いていて車が通れた

ので、無事予定の作業を完了。風が冷たく零下 2℃になり、体感温度はマイナス 10℃ほどか、顔が痛いほどである。みんな寒風の中で震え上がっているのも、大急ぎで作業に取り掛かった。

植えてから数年たつのに成長しないというので、作業前にナラの根元を掘ってみた。幹が埋まっていて、根が地表から 30 センチほどのところに出ている。側根が息苦しいのか、地表に向かって伸びている。太い直根は曲がり、横に出たものが多い。これはポット苗を植えたためにねじれたのだろう。いわゆるゴボウ根は伐って植えるほうがよい。細根が少なく菌根は全く見られない。側根の中にも先端の腐ったものがあるので、成長が悪いのもうなずける。ここでは水を植え穴にためるために高さ 15 センチ程度の小さい苗を深植えするが、その穴に土が入って根が埋もれてしまったようである。大きい苗木を植えるマツの場合と、かなり条件が違うらしい。

炭、炭堆肥、土の三種を 5 本ずつ選んだナラの根元に埋めることにして、場所と方法を決めた。深さ 30 センチほどの穴を幹の片側に掘り、根を露出させて剪定し、その穴へ丁寧に資材を入れて土で埋め戻す。作業は樹木医の伊藤さんと栗栖さんの受け持ちである。霊丘のナラの根元から取ってきた土には菌根菌の胞子が含まれているはずだから、うまくすれば菌根ができるかもしれない。炭や炭堆肥は菌根の形成を助けるだけでなく、通気を良くするために加えてみた。肥料も多少は必要かもしれないので、どちらが効くか確かめなければならない。処理の仕方でも反応が違ってくれば面白いが、野外実験は予想通りにいかないのが常である。会社にいたころ、「やってみなければわからない」といったら、「そんないい加減なことでは困る。成功率は何パーセントか」と、よく攻め立てられたものである。

4月29日

最後の日になるので、し残した仕事をかたづけるために、また白登苗圃に行く。ちょうどマツの播種床を作っていたので、一区画借りて、その表面に霊丘の山の土をすきこんでもらった。これはマツが生えているところから取ってきた土である。シーズンにキノコを集めて胞子を採り、それを播く方が确实だが、手間がかかるので、便法として山土を使うことも多い。また、こうすると複数の菌が感染してくれる可能性がある。この苗圃は畑と同じように全面施肥されている。外生菌根菌の接種には望ましくないが、無肥料で苗を育てるのには、強い抵抗があるらしく、なかなか理解してもらえそうもない。売り物にするには早く大きくする方がよいので、無理もないのだが。

伐採してあった少老樹にキノコ接種をする作業は、やはり伊藤さんと栗栖さんの受け持ちである。ヒラタケやナメコの種菌を接種し、日陰にホダ木を置いて粗朶をかけて覆い、時々水をかけてもらうようにした。とにかくひどく乾くところなので、どの程度菌がつかしてくれるか心配である。ただ、去年の秋来た時に、伐採して積んであった太いやなぎの丸太から立派なヒラタケとオオワライタケが出ていたので、望み無きにしてもあらずといった

ところ。

これまでは仕事が忙しく余裕がなかったが、午後は大同市の博物館を初めて見学させてもらった。規模は小さいが、日本なら国宝級になる陶磁器があって、なかなか見応えがあるので、十分訪れる価値がある。歴史の長さや文化の奥深さを比較するのも一興だろう。劉邦の時代、前漢のころ、日本はまだ縄文期だったのだから、相手をなめていると飲み込まれてしまう。若い人には過去と現代のこの大きな違いを、ぜひ学んでほしいと思う。

行くたびにお土産を買いにスーパーへ行くが、年々品数が豊富になり、なんとなく値上がりしているように思える。この間買ったものの中でお勧めの品は湯葉と菊の花の乾物、サンザシのお菓子である。お茶も買うことにしているが、これは南のもので、ここでとれたものではない。藍藻も面白いが、なんとなく汚いので敬遠する。

多分この日の夕食はキノコ鍋だったと思うが、最近北京でも大同でもキノコ鍋が流行っている。中国名で10数種類のキノコを鍋に放り込むので、同定するのは難しい。以前は生ものを出していたが、今はゆでられているので、ますます見分けがつかない。ただ、シイタケ、ヒラタケ、マツタケ、エノキタケ、ヤマブシタケ、アラゲキクラゲ、キヌガサタケ、フクロタケ、アマタケは、何とか見分けることができた。キノコ好きの人は、ぜひ一度お試しあれ。

これまでアジア各国を回ってきて、気づいたことだが、キノコ栽培と経済発展の間には強い相関関係がある。国が豊かになり、食生活が向上すると、たんぱく質の摂取量が増えて、まず官吏や警察官、政治家のお腹が突き出てくる。肥満からくる高血圧、高脂血症や糖尿病が気になりだすと、決まってキノコが宴会料理に顔を出す。今は栽培が簡単にできるので、さほどぜいたく品でもなくなって、普通の市場にも生ものや乾物が並ぶようになった。東南アジアでは華僑系以外はあまりキノコを食べないが、中国の消費量は相当なものである。事実大量に輸入されていた菌床栽培のシイタケが、このところすっかり姿を消したのも、国内需要が増えたからである。

夜行列車の時間までホテルで休憩し、10時50分に出る寝台車に乗る。寝る前に焼酎を飲んで何とか寝るが、いつも睡眠不足になる。北京まで6時間半近くかかり、早朝5時半に北京西駅に着いた。この駅はだだっ広くて、いつ行っても駐車場までたどり着くのにひと苦労するので、中国の人たちにもすこぶる評判が悪い。

ホテルに入って少し休んだ後、みんなで天壇公園へコノテガシワやビャクシンの古木を見に行く。天壇は清朝の歴代皇帝がその年の豊作を神に祈ったところで、祈年殿や円丘が有名。今は人民公園になっていて、社交ダンスが流行っているらしく、ダンスクラブや体操クラブ、歌を歌う人などでにぎわっていた。観光客だけでなく、老人も多くなっているようだった。

木を見に行ったのは、大同の市内に植えているマツが枯れだしているのだから、代わりに何を植えるか、考えるためである。広い園内にはコノテガシワやビャクシンの仲間が整然と植えられており、樹齢800年を超えるものも珍しくない。常に補植されてきたらしく、樹

齡の異なるものが混じり、地表もきれいに掃除されていた。大気汚染にも強いのか、枯れているものはほとんどない。これらの木は、いずれもアーバスキュラー菌根をつけているので、マツに比べると菌も根も土壌汚染に強い。ただし、成長は遅い。おそらく、大同でも街路樹として使えると思われるが、大同市は成長が速いマツにこだわっているようである。北朝鮮の金正日将軍もそうだが、冬季に緑色がなくなる地域の人々は、常緑樹に対して何とも言えない憧れに似た思いがあるらしい。暴君ほど、すぐ緑色にしろと命令するようである。

久しぶりに汗ばむほど暖かくなり、バスの運転手が教えてくれたレストランで昼食をとり、16時発の便に乗るため空港へ向かった。これで用事はすべて完了し、みんな無事帰国。まだ、前期高齢者だが、くたくた。2、3日熟睡した。また、今年8月から9月にかけて、測定するために同じメンバーで出かけることになっている。